

を買う話になった時は値段の高い指輪をたくさん見れるよう銀座で買うことを推した。今はまだ3店目。お姫様が気になる指輪を見つかるまでじっと待たないとね。これぐらい待つなら平気と思えるのは惚れた弱みか。毬江ちゃんが俺を待っていた長い長い年月に比べれば平気の部類に入る。

「……」

毬江がとあるショーケースの前に立ち止まった。どうやら気になる指輪があったらしい。毬江の視線を辿ってみると、そこには小さなたくさんのダイヤモンドを指輪全体に一周ぐるりと贅沢に並べたパヴェリングがあった。

「毬江ちゃん、試しに着けてみる？」

「コクンと小さく毬江がうなずいた。」

小牧は近くにいた店員さんに、試しにつけてもいいですかとお願いした。

店員さんはにこやかに答え、毬江に指のサイズを聞いた。

毬江にとってそれは想定内の質問だったのだろうか。店員さんは自分に何を聞いたのか小牧に聞くこともなく、店員さんに復唱をお願いすることもなく毬江は明瞭に答えた。

小牧や小牧の知る人以外に、はっきりと答える毬江を見て、毬江自身が成長し、毬江の世界が広がったことを表しているかのようで小牧にとっては嬉しかった。

小牧の側にとっては見えないショーケースの下の棚から、店員さんが毬江と同じサイズ